

室井尚×吉岡洋 連続講座

# 哲学とアートのための 12の対話 — 「現代」を問う

テーマ **10** ウイルスという隠喩



---

## 第10回 ウイルスという隠喩

---

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

安藤 では時間になりましたので、講座を始めたいと思います。もう10回ということで、残すところ2回になりましたね。よく続けられたというか、室井尚×吉岡洋で片方がおられないのに、このタイトルのままの連続対話が続いたのも皆さんのおかげだと思います。ずっと出席してくださってありがとうございます。今回は「ウイルスという隠喩」というテーマで、こちらの参考資料には「隠喩としてのウイルス」となっていますが、その説明は吉岡さんの方からあると思います。

いつも通り前半は吉岡さんのお話があつて、後半が質問やディスカッションの時間です。それから、オンラインのフィードバック映像、第8回と第9回の分がまもなく公開されていますので、ぜひご覧ください。ホームページに掲載する書き起こし、それからダイジェスト映像の方は少し遅れていますが、これもまもなく公開される予定です。ではいつものように、昨年3月12日に行なつたプレ講座から抜粋したものを観ることから始めたいと思います。



<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?feature=shared&t=2685>

プレ講座 (2023.3.12) 記録映像  
第10回 ウィルスという隠喩

吉岡 こんにちは。今日は天気が悪いのにたくさんお集まりいただきありがとうございました。今回のテーマが「ウイルス」だから、もうみんなウンザリかなと思っていただけたけれども、逆に関心を持っていただいたみたいでとてもうれしいです。

さて「ウイルスという隠喩」というテーマを考えたのですが、これはもともと僕が発案して、室井さんもそれはやろうって言ったテーマなんですけど、今日の資料を作っている時に、「隠喩としてのウイルス」になっちゃった。まあ同じようなことなんですけど、こういう風に変異を促すのがウイルス的であると思います。ですがウイルスの話に入る前に、まず「隠喩」という言葉について少し話しておこうと思います。「隠喩」という言葉だけで、何か難しそうと思って抵抗感を持つ人がいるかもしれないので。

「隠喩」というのは、確かに日常会話ではあまり使う言葉じゃないと思いますが、隠喩というのは比喩、つまり言葉の喩えの一種です。広い意味での美学の中には、言葉の喩える働き、つまり比喩について考える文芸学という分野があります。非常に古い起源を持つ学問なんです。古い時代には「修辞学」という呼び名もありました。

修辞学とは「レトリック」ですね。現代では「レトリック」というと、単なる言葉の言い回しだけで事実を誤魔化したり、都合の悪いことをはぐらかしたり、人を騙したりというような悪い意味で受け取る人もあるかもしれません。単に言語表現だけのことで、実体を伴っていないというネガティブな意味で受け取られることもあります。けれども、学問としてのレトリックというのは言葉の働

きを深く探求する分野であって、ギリシア、ローマの古典時代からあります。

現代の学問的知識においては自然科学や工学が支配的な位置にありますが、古代においてはレトリックがきわめて重要なものでした。なぜ重要だったかという、それは今の科学技術が重要視されているのと同じで、要するに「役に立つ」からなんですね。レトリックが何の役に立つかという、それは多くの人を説得するのに役にたつわけです。この点でも今の科学技術と似ています。現代では「科学的に正しい」と言われると、人はその理屈が理解できなくても説得されてしまうからです。

現代人は「レトリック」という言葉を意識的には使いませんが、それでもレトリックを使っています。レトリックは言語活動と不可分であり、レトリックを使わなかったら書いたり喋ったりすることはできません。だから私たちはみんな使っているのだけれど、無意識ですね。無意識にレトリックを使っている。

さて、そのレトリックにおいて非常に重要な一要素が、比喩というやつなんですよ。つまり「喩える」ということです。喩えるというのは、要するに違うものと同じものであるかのように扱うことです。この世界は多種多様な事物で出来ています。Aという事物とBという事物は、本来は全然違うものである。それを分かちながら、「AはBのようだ」とか「AはBだ」と言うことが比喩です。現実世界ではかけ離れていても、言葉では隣同士に並べたり、重ね合わせたりすることができるからです。

さてその比喩の中でもいちばんよく論じられてきたのが隠喩、メタファーです。文芸学や美学、芸術学では一番熱心に論じられてきたんじゃないかな。けれども現代は科学技術が知識のモデルになってるから、比喩も隠喩もあまり重視しません。正確に用いられた言葉は実在する世界の事物に対応しているかのような、素朴な考え方が支配的です。たとえばウイルスというのは、自然科学、生物学や医学とかそういう専門的な学問の研究対象であって、それ以外の何者でもない。ウイルスは隠喩だなんて言うと、単純な問題にわざと知的ひねりを加えているような印象を持つ人もいるかもしれません。隠喩なんていうこと自体が難しい話に聞こえる。そんなんじゃないくてウイルスそのものを教えてくださいって言いたくなる人もいるかもしれない。

しかし比喩、隠喩は言語活動の根本にあるものです。難しいと思えるのは、私たちが行なっている言語活動そのものに謎があるからなのです。けれども難しいといっても怖がる必要はなく、面白いものなので、楽しみながら知ることができます。謎を謎のまま許容しながら楽しむというのは、とても知的なことです。分からないことは受け付けない、というのではなく、謎も受け入れられる免疫をつけた方がいいですね。だって実際には隠喩なんて言葉を知らなくても、私たちは知らず知らずのうちに毎日のように隠喩をいっぱい使っているからです。

ちょっと黒板に書いてみると、隠喩と対立するものとして「直喩」という言葉があります。これは日常会話ではさらに使わない言葉かもしれませんが、でも例を挙げれば、誰でもあー、あれのことかと思えますよ。

直喩の例はたとえば「雪のように白い肌」と言う時の「雪」が、肌の白さを表す直喩なんですね。簡単に言うと、雪と肌とはまったく違うものだけど、それを結びつけているのが比喩なんです。で、直喩というのは何かというと、中学や高校の国語教科書に書いてあるような説明の仕方をする、「……のような」という言葉が入っているのが直喩であると説明することができます。

それに対して隠喩とは何かというと、「雪の肌」というような言い方です。「……のような」がないわけね。この「……のような」という言い方は言ってみれば、雪と肌とはもちろん違うモノだけどね、それでも並べたいくらい、その肌は白いと言っている。それに対して「雪の肌」は、言葉の上では雪と肌がイコールになってしまっている。これが隠喩です。雪は肌じゃないことは分かつ

ているけど、それをあえて留保なしに雪イコール肌だと言っているんですよ。でも、私たちはそんなナンセンスだとは思いません。隠喩なんていう用語を知らなくても、日本語話者の人だったら「雪の肌」が何を意味するか、誰でも理解できるんですよ。そしてそれを「雪のような白い肌」と区別することもできるはずなんです。もちろん日本語以外の言語でも、こうしたことに対応する現象はあります。

さて、直喩と隠喩とはどっちがインパクトありますか？「雪のような白い肌」と「雪の肌」と表現を比べてみた場合、どっちがより表現として訴えるかというと、一般的には明らかに隠喩の方が印象が強いんですね。本来違うもの同士を説明なしにイコールで結びつけているからです。それによって私たちの言語的な理解力に挑戦し、刺激を与えているわけですね。

隠喩はうまく使うと効果的に人を説得する道具になったり、また文学的表現として力を持つことができるんですね。逆に陳腐化した隠喩を下手くそに使うと、目も当てられないですけどね。エネルギーが高ただけに失敗した時の被害も大きいというのが、隠喩の特徴だと思います。

比喩の話ついでに、隠喩以外の比喩についても少し整理しておきます。換喩とか提喩というのがあります。これらは隠喩よりもさらに用語としては知られていないかもしれませんが、私たちは日常会話の中で、毎日無意識に使っています。換喩というのは、対象それ自体を指さないでそれに付随している何かとか、対象が存在する場所とか、その近くや隣にあるものを呼ぶことによって、対象を指示する言い方です。たとえばテレビのニュースで、「永田町に衝撃が走りました」とか「ホワイトハウスは沈黙しています」みたいな表現です。永田町は地名だし、ホワイトハウスは建物じゃないですか。この表現が実際に指示しているのは、永田町やホワイトハウスにいる、政治権力を持つ特定の人々のことです。

もっと身近な例で言うと「きつねうどん」というのも換喩です。あまりにも当たり前で気づかないのですが、日本語を習い始めた人がキツネの肉が入ったうどんなのかと思ったという話があります。これは油揚げがきつねの好物である（本当にそうかどうかはともかく）という知識が背景にあって、油揚げをきつねによって言い表しているわけです。さらにひとひねりしたのが稲荷寿司ですね。

こうして考えてみると、私たちが何気なく話している言葉のかなりの部分が比喩でできていることが分かるでしょう。提喩についても少し言っておくと、これは換喩の一種と考えることもできますが、階層の異なるものを使って指示する方法です。たとえばあるグループがあって、グループ全体の名前があります。そのグループを構成している個々のメンバーもまた、別な名前を持っています。そこでグループを表すためにメンバーの名前で呼ぶとか、逆にメンバーを表すためにグループの名前を使うというのが提喩です。つまり階層が違うわけですね。

こないだ『翔んで埼玉』という映画の二作目「琵琶湖より愛をこめて」というのを見たんですけども、そこに「琵琶湖周航の歌」というのが出てきます。人気のある歌だと思いますが、「われはうみの子」という出だしですね。この「うみ」とは湖のことも意味しますが、ここでは浜名湖でも太平洋でもなく、琵琶湖のことであるのは誰でも分かります。琵琶湖は「うみ」というグループのメンバーにすぎないのに、グループ名で呼ばれているわけです。

それと逆の例は、「○○小町」というような表現です。小町とはもちろん小野小町のことで、彼女が本当に存在したかどうかは分からないけれども、歴史に残る美人というグループのメンバーであることは確かですね。でもそのグループにはクレオパトラや楊貴妃のような別のメンバーもいます。しかし「○○小町」という言葉が言い表しているのは、ある人が小野小町に似ているということではなく、○○でいちばんの美人だということなのです。さらには「ちょっとお茶行く？」というようなのも提喩です。この表現は、喫茶店に行っておしゃべりしましょうという意味ですが、

お茶ではなくコーヒーやジュースを飲むかもしれないからです。この「お茶」は紅茶や緑茶のことではなく、人と話をする時に飲む飲み物一般のことです。

比喩についてずいぶん時間を使ってしまったのですが、それは比喩をはじめとする修辞、レトリックというものが、いかに私たちの言語活動と認識に深く入り込んでいるかということを出してほしいからです。レトリックというのは「言葉の綾」などと言われてたりしますが、それはただの飾りではありません。現実をありのままに言い表す言葉があつて、それに着せられる衣装というようなものではないのです。このことを知った上で、「隠喩としてのウイルス」ということを考えてみたいわけです。

このタイトルの元ネタは、スーザン・ソントグというアメリカの批評家を書いた本『隠喩としての病い』です。とてもよく読まれてきた本で、翻訳書も何冊か出ています。読まれた方もいると思いますが、簡単にどういう内容なのかに触れておきます。病い、病気というのはそれ自体は生物学的、医学的な現象であつて、言語的に構成されているものではありません。「病いは気から」ということわざはあるけど、風邪は「風邪」という言葉があるから存在するように思えるだけだと考える人はいないと思います。

とはいえ、言葉は病気の原因ではありませんが、病気という現象と分かち難く結びついています。特定の病いについて人間が物語るときには、客観的で中立的な語り方はほとんど不可能である。私たちは病いそれ自体についてではなく、まるで病いが何かの喩えであるかのように語ってきたのです。

それはすべての病いについて均等にそうだというわけではなく、多くの人の注意をひく特定の病いについてです。特に人間の関心を強く引く病いとは、まず命の危険を伴う病い、致死率の高い病気ですね。そして原因が分からず、治療法も確立していないような病い。ヨーロッパの歴史ではまずペストやらい病が思い浮かぶでしょうが、より近代になると梅毒、結核、そして癌がクローズアップされてきます。

病いが何かの比喩として語られるというのはどういうことかということ、たとえば17世紀のイギリスでは「幸福な人はペストにかからない」と言われていたそうです。逆にいうとペストという病いは不幸という人間の運命の隙につけ込んで侵入してくるかのように考えられた。つまり、ペストに罹った人というのは幸福ではない、つまり自分の精神状態の中にスキがあつた、欠陥があつたという風に意味付けられてしまう。そのスキに病気が入ってくるんだというような観念がかぶさってくるんですね。

結核の場合もそうです。近代文学を読むと作品の中に出てくる主人公が結核にかかるというストーリーは多いですけど、書いている作者自身も結核であることが少なくない。明治から昭和に入っても戦前までの時代は、結核は不治の病で治療法がない。すると、それが単なる病気という意味を超えてある種の、何て言うかな、その人間の運命であるとか、美術家や作家のような人の場合だと、類いまれな才能に恵まれながらそれを十分に使い切る時間を運命が与えてくれなかったというような、悲劇みtainな意味づけが、結核という病気をきっかけに行われるわけです。結核とかペストはそれ自体は深刻な病いではありますがけれども、それと同じように、比喩的な意味でも私たちの世界観にも大きな影響を与えてきたものだと思います。

病いの隠喩的な影響ということをもうちよつと身近な例で言うと、アホは風邪ひかないというような言い方がありますね。実際、僕はほとんど風邪を引かないんですけども、子供の頃はよくアホは風邪をひかないと言われていたので、ひいた方がいいのかなと思っていました。これもやはり、病気に関してある種の精神的な意味を与えてきた例だと思います。けれどもウソというわけではないのです。以前、藤田紘一郎さんという寄生虫学者と、いろんな場所で3回ぐらい対

談したことあるんですけども、彼と喋っていた時にこのことが話題になりました。

藤田先生によると「吉岡さん、アホは風邪引かないというのはある意味その通りなんですよ」と。じゃあ僕はアホですかと思ったんですけど、この場合アホというのは頭が悪いというよりも、競争に負けたり困った問題があってもそのことをクヨクヨ気にしないで、まあいいかと思っていられるような心の状態のことです。要するにストレスが少ないということですね。免疫系はストレスに非常に敏感に反応しますので、心配したりクヨクヨ悩んだりしない人の方が、免疫活性が高いという意味ですね。その意味ではアホが風邪ひかないというのは、その通りなんです。

逆に言うと、風邪引きたくないんだったらアホになればいいということですね。現代は情報過多の社会で何でも知らなきゃいけない、つまり賢く生きなきゃいけないというプレッシャーが強いから、アホになるのは難しいですね。昔の人は藤田先生が言われるような医学的な根拠を知らなくても、ストレスをかけない生き方の方が病気になりにくいことを何となく知っていたのですね。

さて、ではウイルスのことについて考えてみたいと思います。まず今回のチラシの表面のイラスト。これが実際のウイルスの形ですね。僕と室井さんがウイルス型の乗り物に乗って、タヌキの警官を追いかけしているという場面です。すごくうまく書けていると思いますよ。僕が乗っているのが、インフルエンザとかコロナのような球体型のウイルスですね。それに対して室井さんが乗っているのが、何か機械みたいに見えるかもしれませんが、バクテリオファージというウイルスです。これは人間の細胞じゃなくて、バクテリアに取り付くウイルスなんですけど、電子顕微鏡で見ると本当にこんな形をしているんですよ。



イラスト／谷本 研

この世にはなんでウイルスみたいなものがあるのか。コロナ騒ぎのために私たちはウイルスは恐ろしいもの、人間に敵対し害をなすものというイメージを植え付けられてしまいましたが、ウイルスは人間を攻撃するために存在しているわけではありません。そしてウイルスは想像を絶して小さく、強力な自己複製能力を持ち、変異のスピードも速いので、たとえ人間にとって都合が悪いウイルスがあったとしても、完全に撲滅してゼロにすることなんて不可能です。

ウイルスは細菌よりもはるかに小さく構造も単純なので、生物進化の原始的な段階のように思う人もいるかもしれませんが、そうではありません。そもそもウイルスは生物とは言えないからです。これは生物をどんなふうに定義するか次第でもあるのですが、自己複製をして増えていくという点では生物のような側面もあります。しかしウイルスは自力では自己増殖はできず、他の生物の細胞の中に入り込んで、その細胞の部品を使わせてもらわないと、自分を増やしていくことができません。そもそもウイルスには栄養を摂取してエネルギーを作り出す能力がなく、新陳代謝もありません。つまり、何かを食べることもなければ排泄することもありません。

ウイルスについての基本的な知識を得たい方は、テレビに出てくる専門家の話を聞くよりも、高校の生物の教科書を読むのがいちばんいいと思います。生物学はこの半世紀くらいで劇的に進歩しましたから、僕が高校の頃に比べて今の高校生物の教科書は本当によく出ています。他の科目、たとえば世界史なんかもそうですね。僕と年代の近い方は、現代の高校の「世界史B」の教科書を読むと、今世界で起こっていること、ウクライナやガザで起こっている出来事、大きな歴史的背景が分かります。と同時に、テレビや新聞などのマスメディアがいかに関局的なイメージを押し付けているかもハッキリ知ることができます。いわゆる陰謀論にハマらないためにも、高校の教科書を読むのはオススメです。

さて、ウイルスが生物でないとしたら一体何者なのかということ、その本体はDNAとかRNAのような、つまり遺伝情報を担う分子機構です。そのまま剥き出しでは壊れてしまうので、それが膜によって覆われた構造をしているんです。それだけのものだからとても小さい。数十ナノメートルから100ナノメートルくらいです。ナノというのは10のマイナス9乗、つまり10億分の1ということです。だから100ナノメートルだと1,000万分の1メートルです。数字だけではイメージが湧きにくいですが、地球の直径が約1万2千キロつまり1,200万メートルですから、もしも地球が一つの身体だったら、その身体の中にいるウイルスは、実際に私たちが見ている120センチほどの子供くらいの大きさですかね。

ウイルスについてはまだ不明なことも多く、ウイルスはなぜ存在するのかということについては、教科書にはハッキリとは書いていないと思います。しかし福岡伸一さんという有名な生物学者によると、ウイルスは比較的単純な構造をしているから生命進化の始まりからこの世界にいたのかということそうではなく、真核細胞、つまりその細胞の中に染色体を含む核が存在するような、そういう段階以降に生まれたものであると言います。染色体の中に遺伝情報が格納されているわけですが、その遺伝情報の断片が何かの理由で細胞から飛び出したものがウイルスなんだという考え方です。

ウイルスはいろんな生物の細胞から細胞へと乗り移りながら、自然界を循環している。生物の側から見ると、それはウイルスに感染するという事です。つまりウイルスは自然の一部であって異常な存在ではなく、絶滅させたりすることは不可能だし、そうすべきものでもないということです。では、なぜ存在するのかということを見ると、生物の進化を加速させるためにあるというふうに考えられるんです。これは全ての生物学者が同意する定説というわけではないのですが、非常に興味深く説得力のある考え方だと僕は思います。

オーソドックスな進化の考え方は、親から子へと遺伝情報が引き継がれていく過程で変異が

起こる。つまりいろんな性質を持つ子供が生まれるということです。その中から、環境により適合した子供が生き残りやすくなり、その子供の持っている性質が広がってゆく。環境つまり自然の方を擬人化して考えると、それはまるで自然がより適応した個体を選んで見えるから、これをナチュラル・セレクション、「自然選択」と呼んだわけです。「自然淘汰」と訳されることもあります。「淘汰」とは本来は水で洗って不純物を取り除くという意味で、悪いものを除去するというニュアンスが強くなりますね。

自然選択はダーウィンの進化論の核心ですが、その根底に自然の擬人化があることは重要です。まるで自然がより優れたものを選別しているかのような印象が生まれ、そこから、自由競争によって自動的により優れた存在が生き残るという考え方が生まれます。これはダーウィンの思想ではなくてダーウィニズムですね。現在の新自由主義的な政治思想の根底にもこれがあります。民営化し規制緩和して競争を激化させれば、自然に優れたものが生き残るという考え方です。

しかし自然選択の発想の元は人為選択です。つまり人間が、家畜やペットを品種改良してきた長い歴史があります。ダーウィンは鳩の嘴の形とか、人為選択によって生じる様々な変異に興味を持っていました。「改良」といっても、人為選択は人間にとって都合がいい方向への変化であって、その生き物自身にとっては必ずしも好ましい変化ではありません。

一般にはダーウィンと言えば進化論、自然選択ですが、自然選択による進化という考え方が広く受け入れられていくのは20世紀に入ってからです。僕にとってダーウィン自身の思想で最も重要なことは、地質学的な長い時間を通じて、生物界が示す多様性に対する驚異の念です。進化論が巻き起こした論争や、適者生存みたいなイデオロギーはダーウィンの思想とはあまり関係がないと思います。それよりも、たとえばミミズによる土壌の形成について考えているのがダーウィンの思考だと思います。

それはともかく進化、自然選択という思想が生物学を越えて20世紀以降の私たちの世界観に決定的な影響を及ぼしてきたことは否定できません。ウイルスは、こうした進化という考え方を新しい段階に移行させるものです。自然選択や性選択による進化には長い時間がかかりますが、ウイルスはいわばそうした進化のプロセスを加速させるものなのです。それは良いことなのか悪いことなのか。どちらでもありません。そもそも進化には善悪はないからです。進化というと、より劣ったものが淘汰されて、だんだん優れたものへと向上していくといった一般的イメージがあるかもしれませんが、そんなことはありません。自然は善悪の彼岸にあるからです。

だから、ウイルスは人間にとって良いとも悪いとも言えないのです。確かに個体にとって害をなすウイルスも存在しますが、ウイルスに感染することによって進化が加速され新たな種が生み出されるということもあります。ウイルスによって生み出されたのはどんな生き物かといえば、私たち自身もそうなのです。人間だけではなく、哺乳類一般ですね。哺乳類のゲノムには、レトロウイルスの遺伝子の断片が存在しており、それらの遺伝子は胎盤の形成に役立ったと推測されています。胎盤というのはすごいメカニズムです。お母さんと胎児とは血液型は違うかもしれないし別の生き物じゃないですか。普通自分の体内に別な生き物がいたら排除する機構が働くのですが、それはしないで栄養だけは通すというシステムが胎盤です。そのためのデリケートな機構があるのですが、それが形成されたのは、私たちの先祖が古い時代にウイルスに感染したからなのです。

もちろんウイルスは哺乳類を作り出してあげようとして働いてくれたわけではありません。ウイルスはひたすら機械的に自己複製をしてきただけなのです。しかしその結果として、哺乳類が誕生したということですね。

そう考えると、ウイルスとは私たちにとって善か悪かと考えても意味がないことが分かると思い

ます。そもそも自然界、生物界には善悪はありません。にもかかわらずメディアの情報は善悪の基準で語られ、私たちはそれに深く影響を受けます。しかしウイルスだけではなく、それ自体として身体にいい食べ物とか、薬とかいったものは存在しません。喫煙ですら、単に身体に悪いと断定することはできません。薬や医療が、単純に私たちを健康に導いてくれるわけでもありません。しかしメディアはすべてを善悪で語ります。そうした方が商品が売れる、医療費が稼げる、つまりお金が儲かるからです。

ちょっと時間がなくなってきたから飛ばしていこうかな。資料は室井さんの『哲学問題としてのテクノロジー』という本から少し取り上げたんですが、室井さんはウイルスというテーマで書いたことはあまりないんですね。けれども隠喩としてのウイルスについては、ウイルスという言葉を使わなくてもたくさん書いて来たのではないかと思う。この資料に上げたのは直接ウイルスについて何か言っているわけではありませんが、文明がそもそも外部への想像力によって成り立っているというか、人間がここではない異界のようなものに惹かれることが文明の根底にあるということ論じたものです。あるいは外から侵入してきた異物が、何かここではない世界について想像させるというようなことが非常に大事なんだというように書かれています。

この中に、細胞の中にあるミトコンドリアという器官は、もともと別の生物が寄生したものとされているという指摘がありますね。これは有名な話だから知っている方も多いかもしれません。それこそ高校生物の教科書には必ず載っていると思いますが、我々の細胞の中にあるミトコンドリアという微小器官は、呼吸の働きになくてはならないものなのですが、太古において外から侵入した細菌が細胞に寄生した痕跡なんですね。それがやがては細胞と共生するようになり呼吸をつかさどる細胞の一部となったものです。ほとんどの真核細胞にはミトコンドリアが多数存在していて、肝臓や腎臓、筋肉、脳など活動性の高い器官の細胞ほどたくさんあるそうです。

ひとつの細胞中に300個以上存在し、重量にすると体重の一割くらいを占めると考えられています。つまり体重60キロの人だったら、6キロはミトコンドリアなんですよ。すごいじゃないですか。でもまあ、ミトコンドリアだけじゃないですね。人間の体内に住んでいる細菌の数は、数十兆と推定される体細胞の10倍くらいあるのではないかという説も出ました。これはよく分からないのですが、しかし少なくとも体細胞と同じくらいの数はいるのではないかとされています。これも重量にすると2キロくらいになります。つまり私たちが自分の身体だと認識しているものの一割くらいは大昔に細胞に入り込んだミトコンドリアで、数にして少なくとも半分くらいは細菌なのです。こうして一人の人間が歩いているように見えるけど、見方を変えれば細菌が歩いているのです。

ウイルスはもつとずっとちっちゃいけれども、やはり私たちの身体を構成している一つの要素ではあります。メインストリームの進化論では、さまざまな種や個体が環境に適応して生き残るべく競争しているようなイメージですが、そもそも生物の身体とはそれ自体がさまざまな外来物が共生している生態系であるという考え方もできます。真核細胞とはミトコンドリアや葉緑体のような外来物が細胞に寄生し、最終的には共生状態に到達することによって生まれたというものです。これは20世紀の初めにメレシコフスキというロシアの生物学者が提唱し、その後アメリカのリン・マーギュリスが発展させました。

進化論というと、19世紀から主流はずっと適者生存として理解されてきました。自然選択によって適応したものが生き残るという考え方です。この考え方は生物界だけではなく、人間の文明や経済活動についても応用されました。共生を生命活動の根本に置く考え方は、こうした主流に真っ向から反対するものです。適者生存というのは、最初から個体中心の発想です。様々なプレーヤーがいて、誰が一番優れているかを競争しているというイメージなんですね。それに対してマーギュリスは、ミトコンドリアをはじめとする生命現象を考えていくと、生命というものは個

体レベルの競争としては理解できないと主張します。これが共生説です。これも高校の生物教科書に紹介されています。

教科書を読むのも面倒くさいという人は、高校や予備校の先生がわかりやすく動画で説明してくれている番組も、YouTubeにありますね。

さて隠喩としてのウイルスということから言うと、私たちの文化とか文明、社会の中にも、システムに外から侵入して寄生し、システムのあり方を変えていくウイルス的なものがあると考えられると思います。僕はそうしたウイルス的な存在が、文明や文化の異なった場所を活発に往復しながら、いろいろなものを変化させていくようなダイナミズムがあるのではないかという考え方を若い時からずっと持っていました。それで、この室井さんと共著で書いた『情報と生命』という本の冒頭に、ちょっとイタズラっぽいというか、普通の学術書ではあり得ないようなフィクションを書いたことがあるんですね。

それがこの「私というシステム」という会話というかモノログみたいなテキストなんですね。これが『情報と生命』の最初に載っていますが、この元は何かというと、実はこの哲学講座を企画運営してくれている小杉さんと安藤さんの美術ユニット「KOSUGI + ANDO」による作品の一部だったのです。これは昔のMacintoshで人気のあったハイパーカードというアプリケーションを使って作られています。これを見てああ懐かしいと思う人はいませんか(笑)。僕に近い世代の人にはいるかもしれません。本格的なプログラミングの知識がなくても、アニメーションなどダイナミックな動作が実現できる素晴らしいものでした。

それを使って、バクテリオファージみたいなウイルスが地球に着陸して、地球外から来たエイリアン的な存在が人類の文明とか精神とかに寄生・融合して、いろんな変化をもたらすというようなイメージをテキスト化したものです。この発想源のひとつは、チラシの紹介文の中にも少し触れたのですが、ウィリアム・S・パローズというアメリカの作家が書いた「言語は宇宙から来たウイルスだ (Language is a virus from outer space.)」という言葉です。これがあまりに面白いので、室井さんともよく話をしましたが、面白いと思ったのは僕らだけではなく、ローリー・アンダーソンというアメリカの有名なアーティストのパフォーマンス作品の中にもあります。もしも言語が宇宙から来たウイルスだったとしたらという空想から、僕はそのウイルスに自分になったとしたら、そいつは人間の脳に入ってきたときにどう感じ何を言うかなと思って書いたテキストがこれなんですね。

生物も人間も文明も、異物が共生している環境であるという見方はとても面白いと思うのですが、いまだに多くの人が認めているとは言い難いですね。でもミトコンドリアが外来生物であったという説は、マーギュリスが言い出した時には激しく叩かれたそうですが、今は共通認識になっています。ウイルスによる胎盤形成のメカニズムに関しても、今ではかなりの人が認めています。とはいえ個体中心の自然選択という考え方は、今でも権威がありますね。でも調べてみたら、ちゃんとミトコンドリアの中にはDNAがあって、それは私たちの細胞自体の核にあるDNAとは別なんですね。つまり完全に取り込まれて同化されたわけではなく、今でも外から来た存在が私たちの生命活動の中核を担っているのです。

さらに最近わかってきた面白いことの一つは、このミトコンドリアというのは、細胞が死ぬプロセス、アポトーシスというんですけれども、細胞が自分で自分を壊して死ぬというプロセスに深く関与しているという事実です。細胞が自分を壊して死んでくれなかったら、個体は困るんですよ。古い細胞が死んでくれてまた新しい細胞ができるからこそ、私たちは生きていけるので、この細胞の自死、アポトーシスがなかったら困るんですよ。

死というのは生きとし生けるものの宿命ではなくて、細胞のメカニズムの中に書き込まれたプ

プログラムです。生命活動というのは放っておくといつまでも回り続けるので、この永久運動を抑制するような機構があるのです。このことは、生命とは何か、「不死」とはどういう意味を持つのかというテーマに繋がっていくのですが、それは多分次回の最終回にお話できると思います。次回は室井さんが発案した「不死と月見草？」というタイトルなのですが、この発想元は太宰治の「富嶽百景」ですね。だから文学的な文脈もあると思いますが、今回はそれに加えて、哲学的な観点、細胞生物学的な観点からも「不死」という問題について考えてみたいと思います。これは、最終回に相応しいテーマであると思います。死について考えることは不死について考えることでもあり、それは同時に生きることについて思考することになるからです。

---

## 参加者との対話

---

安藤 ちょっと考えてもらって、こんなこと聞いてみようかなどありましたら。

吉岡 ちょっと寄せられたコメントに対する反応が遅れていたんですけども、二回分、8回目と9回目のやつをネット配信してあるので、また見てください。もしまだ僕は忘れていたものがあつたら言ってくればまたやります。

安藤 そうですねこの場ではコメントをちょっとしにくいかもしれないけれど、ホームページからできますので、テキストで送ってもらえれば、どんな短いものでも結構です。よろしくお願いします。

吉岡 結構長いが多い。長くて全部読まないといけないのが多いから、僕が配信の中で、その人の分を読み上げるんです。でも面白いですよ。鋭いコメントが多いですね。

安藤 最後は記号学会の説明までしていましたね。記号についてなども。

吉岡 僕がこの講座の中でも時々使う記号という言葉、普通の記号って言ったら何か交通標識みたいな記号しか思い浮かばないです、常識的には。だけど、もうちょっと抽象的な意味で記号と呼んでいるから、それをどういう意味で、何が記号なのかを教えてくださいという質問があつて、それはちょっと答えたけれども、最後に記号学会とはどんなものか気になりますというのがあつて。記号学会というのは、日本記号学会。これは1980年にできた比較的新しい学会で、室井さんはかなり最初の頃からのメンバーで、僕は大学院のときに室井さんに誘われて、もともと美学の研究してたからね。だから大学院に入ったら、美学会というのはいくらも入らなきゃいけないんですけども。だけど室井さん美学会は大嫌いで、僕に「お前美学会なんて、そんなとこばかり行っていたらバカになるぞ」みたいな感じで、「記号学会入れ、入れ」で、僕も入った学会です。これは何かというと、記号学、記号論という学問はあるんですけども、それだけではなくて、いろいろな文化現象とか、自然現象とか経済現象とか社会的な問題とかを記号という観点から見たら面白いんじゃないかというそういう関心を共有したさまざまな分野の人たちが集まっている学会なんです。僕と同じぐらいか、もっと上の年代の人は覚えているかもしれないですけども、1980年前後というのは結構記号学、記号論ブームだったんですよ。学会開くと新聞紙とか週刊誌が来たんですよ。その当時結構有名なメディアによく出ていた学者とかが入っていたりしたんですよ。

それが二、三年のうちに忘れ去られて、でもこれは日本だけの現象で、海外ではセミオティックとかセミオロジーとか、記号論、記号学という学問は大学とか研究制度の中にある程度定着したんですよ。日本は忘れ去られちゃったんです。

それはなぜかな。いろいろ理由があると思うけれども、たぶん日本のアカデミズムというのが明治維新のときからわりと政府が上から作ったという、そういう経緯が強いんでしょう。戦後もそうですね、基本的には。だからこれは縦割りなんですね。領域ごとに縦割りになっちゃう。記号論というのは横断的だから。だから今日の話でいうと記号論ってねウイルスなんですよ、知的世界の中の。つまり横に遺伝情報をダーッと広げていくんですよ。そうするとある現象が人類学

で見たらこう、言語学から見たらこう、哲学から見たらこう見えるとか、そういうことがつながるんですね。

だから亡くなった山口昌男先生とか、出会う人たちも一緒ね。昔は朝日新聞とか岩波の出版までいっぱい書いていたスターみたいな感じですね。でも、彼も自分自身は文化人類学という専門はあったけれどもいろいろな人と対話して、アーティストとか自然科学とか、それからちよつと何て言うかな、宮崎学さんみたいなちよつとやばい反社会的なところに関係のある人とか、それから敗者の歴史ね。つまりこの世界で成功しなかった人の歴史にすごい関心を持ったりする。非常に横断的。だから山口昌男さんもそういう知的の世界の中ではウイルスそのものみたいな感じでしたね。

僕らはそういうのがいいと思ってたから、その記号学を続けてきたんですけども、残念ながら日本ではあまりアカデミズムの中では認められてこなかったから、ものすごく何て言うか、予算的に運営が苦しいですね(笑)。もう潰れるのかって思った時に、ちょうど室井さんや僕らの世代が大学に職を得た。

'90年代になって、もうこれからは君たちに任せるみたいなね。僕らはもう40代になっていたのに、若手若手とか言われて、それで頑張って記号学会を立て直すとか続けてきて、今もあるんですよ。室井さんも会長六年やって僕も会長六年やってそれで今も活動しているんです。そういう記号学会。気になりますと書いてあったから、是非入ってください(笑)。大学の研究室に所属しているような研究者もいるし、デザイナーであるとかアーティストもいるし、占い師の人もいますよ(笑)。僕の卒業生なんですけれども、「私でも記号学会に入っていていいですか?」「どうぞどうぞ」。占いの、四柱推命のプロの。「四柱推命なんて記号学そのものじゃないですか」(笑)って言って入ってもらったりしているんですけども、なかなかね。火の車なんです、財政的に。

安藤 紹介者が一人いるんですよ。

吉岡 紹介者が一人いたらいいんです。僕に言ってくれたら、元会長だから全然大丈夫ですね。この中にも何人か入っている人が……、何人かはいないか。そういう質問も来るので、気楽に。

発言者A 初めてなので……。生物学とかあんまり勉強してないんで、勉強したらすぐわかるよということを開くかもしれないんですけども。外来ウイルスが外来のもので宇宙から来ているというのは、比喩?

吉岡 僕のこの作品にね使うそれは比喩です。文学的比喩。パロウズという人が書いた作品の中から出てきた比喩なんです、実際のウイルスはこれは宇宙から来たのではないです。

発言者A この辺を常にうろうろ?

吉岡 元々僕らの細胞細胞には核というのがあって、その核の中に染色体というのがあって、その染色体の中にいわゆるデオキシリボ核酸というタンパク質が二重のらせん構造になって収納されているわけですね。これが子供が生まれるとき、生殖が行われるときに、一辺ばらばらにされてもう一回新しいものを作るんですけども、つまり僕らが遺伝情報と呼んでいるものの、本体がそれなんですよね。

ウイルスというのは、その一部が核を飛び出して細胞も飛び出して、生物の外というか、自立できないから別の生物に移って、その体細胞の中で生きている状態ですね。それが生物から生物へと移っていく。だから、人間の場合、普通の生殖による子孫の存続の場合には親から子へだから、基本的に同じ生物なんです。同じ種なんです。だけれどもウイルスは全然違う種でも生きていけるんですよ。全然違う種の細胞の中で生きていけるわけです。その典型的な例がさつきも話題に出ていたけれども、人間と非常に近いところで生活している別の哺乳類です。イノシシとか室井さん言っていたね。イノシシとか、それから豚とか牛とかペットとか。それから家畜とかペットでなくても、例えば野生動物と非常に近い環境で生活している人は接触機会が多いですよ。だからそういうふうに向こうに行ったりこっちに来たりしながら、ある種の中では全然害をなさないものが別の所に移ると非常に害をなしたりすることがあり得る、と。だから気をつけなきゃいけないのは、その部分で。

発言者A そうやって聞くと、情報がウイルス、ウイルスが情報という比喩がすごくよく…。

吉岡 ウイルスは情報そのものだからね。情報になったRNAとかDNAをエンベロープという核膜って脂質の膜、油でできた膜でくるんであるカプセルみたいなものです。それは放っておいたら何にもしないんですね。中に入ると、その細胞の中のものを利用して自分を増やしていく。

発言者A 最初のビデオで室井さんが言っていて、本当に突然変異を起こすウイルスもあれば何もしないウイルスもあるって。その突然変異するタイミングというのは、受け手が必要な時に変わるのか、ウイルスがそうさせるのか。

吉岡 これも全然分からない。多分専門家によって言い方が違うと僕は思うんだけど、僕の理解している限りでは、今、我々の体の中にいるウイルスのほとんどは…、いるんですよ、いっぱい。めちゃくちゃたくさんあるんですよ、種類も。僕、帯状疱疹とかになったことがあるんですけど、なった人いますか？(笑) もともといたんだよね。来たわけじゃないんです、あれ。元々いたやつが免疫が下がったことによって出てきたんですよ。神経節の中にずっと住んでいたんですよ。だから健康だったら別にいいんですよ。住んでいても何にも悪さしないから。それがストレスとか老化とか何か色々な免疫の低下させる要因で発現して出てくるんですよ。それが別の神経性にとって痛みを生じるそういう類いのものがある。帯状疱疹とかやはり困るものですよ。病気になる。だけれどもほとんどのものはそれもないんです。ただいるだけなんですよ。なぜただいるだけかという、それは恐らく昔何かちょっと悪さをしたんでしょうね。で、死んだりしたんでしょうね。だけど、個体が死ぬと、それに寄生している寄生体も死にますから、結果、大域的に見るとどうということが起こるかという、毒性の弱いものが生き残るんです。

発言者A その情報というのも何か本当の生物学的な情報だけじゃなくて、また別のアナロジーとして(吉岡 そうそう) 私たちが扱うこういう文章とかの情報で、誰かの考えみたいな感じでウイルスというふうに考えると、誰かのアイデアを入れて、元の考えが変わってしまうという……。

吉岡 誰かのアイデアが入ったことによって、自分が破壊されてしまうような、そういうむちゃくちゃインパクトの強いアイデアがもし入ってきたらもうそれ以上、その人何も考えられなくなってしまうから、結局そこで途絶えちゃうじゃないですか。だからウイルスという隠喩で考えるとね、つまり

ものすごく画期的なアイデアというのは、破壊力も強いから、それは広がらないんですよ。

あまりにも破壊力の強いものというのは面白いけれども広がらない。これは要するに比喻で言うと、毒性の強いウイルスは広がらないというのと一緒なんです。だから、何でコロナウイルスは広がったかという、ここにも書いてあるけど、これは毒性が弱い方なんです。

発言者A アバンギャルドなアーティストは、そうは広がらないみたいに（笑）。

吉岡 アバンギャルドなアーティストの中の本当に破壊力がすごいやつは、多分その場というか、その周りだけで終わっちゃうんですよ。今、僕らが知っているような有名になったり、歴史に残ったりするような芸術運動、アバンギャルド的な芸術運動はウイルスと同じように考えたら、それは毒性が弱い（笑）。毒性が弱いというのはちょっとネガティブな言い方だけれども、むしろいろいろな人の中に転写されていても生き延びていけるというか、その宿主を殺さない。だから僕がその新しいアイデアを受け入れても、僕のアイデアも温存したまま、むしろ共生できるようなものとか、それからさらにいいのは強化してくれるということですね。これは寄生体一般の原理的なことですけれども、ウイルスじゃなくても病原菌とか、それから寄生虫とか、これも僕、藤田紘一郎先生からすごくたくさん学んだんですけれども、寄生虫は人間にとっていいかといういいとは言えないんですよ。だけれども結果的によくなったんですと彼は考えるわけです。なぜかという、最初のうちは寄生すると宿主を殺してしまったりする。しかし、それほど毒性の強い害があるものは、自分も宿主ごと死ぬからそこで途絶える。それはだから強毒ウイルスが広がらないと同じことなんです。では広がるのは何かというと、より毒性の弱いもの。それは宿主を殺さないから。ウイルス、寄生体を持ったまま宿主は子供を作ったりするので、自分も広がることができます。で、さらにいいのはそれがいることによって、その寄生された宿主は他のものよりも有利になるということです。

だから藤田さんが言っていたのは、回虫とかギョウチュウとか昔は日本人の体にいっぱい住んでいたものですね。あれが戦後になってだんだんと…。あれどうして感染するかというと、要するに人糞肥料を使うからですね。人間の排泄物を発酵させて野菜を育てていたからなんです。それでサイクルができていたんですね。それをやめた、やめましたよね。今の人も全然見たこともないでしょ。僕は畑の横にそういう発酵させる…。僕はそこに落ちたことがあるんですけども（笑）、こないだネットの生の動画で言いましたけれども、そういうことがあった時代にこういうサイクルができていっぱい住んでいた。

だから検査すると、もうクラスの半分とかが感染して虫下し飲まされたりしたという時代があったんだけど、それがいる時は、現在我々が悩んでいる花粉症とか、アトピー性皮膚炎とか、つまり免疫系の過敏性による疾患ですね、これが少なかった。それが寄生虫がいなくなって清潔社会になっていくにつれて、その曲線とこれが落ちていく曲線と反比例してというか、それと相反した形で免疫性の疾患が増えていくという。だからそれはいいことをしてくれていたんですよ。けれど、彼が言うのは、寄生虫がいた方がいいのかというそうは言えない。なぜかという寄生虫がいることによって病気になったりすることもあるんだからという。だからそのバランスが問題なんだというのがポイントだと思うんですよ。

（観客 ギョウチュウを持っているとお腹が痛くなるとか……）

吉岡 ギョウチュウとか回虫は僕も持っていた時がありますけれども、お腹の調子が悪くなるとい

うことは極端な例しかないと思う。普通の人は全然平気。ただ、ときどき腸管の中を移動して直腸の方に出てくるので、お尻がかゆくなったりするんです。経験ないでしょう?ほとんど。でもそれだけなんです、大抵の場合はね。でも時々増え過ぎることもあると。

藤田さんの有名なのがサナダムシ。僕は中学の保健体育の教科書か何かでサナダムシの絵というか、写真を見た時はもう何か悪夢にうなされるような恐ろしさを感じたんですよ(笑)。こんなものが人間の中にいるのか、みたいなね。だけど、その藤田さんの話を聞くと、サナダムシというのはほとんど何にも悪いことしない。種類がいっぱいある。「私も実は飼っているんです」みたいなね。それで有名になったんですけど、藤田先生は、サナダムシを飼っている先生ということで。何で飼っているのかというと、やはり自分の体で実験してみなきゃいけない。寄生虫を持つことがどういうことなのかと。「どうするんですか?」と言ったら、まず飲むんですよ。幼生体を飲むんです。卵を飲んででもだめなんです。卵がプランクトンの中に寄生して、そのプランクトンを食べた魚が感染して、その魚の中で幼生体になったものを人間が取り込まない限りは成長できないんですよ。だから自然界全体でサイクルができています。サケとかマスの中にいるらしいですよ、日本のサナダムシは。それを飲むでしょう。そうすると、最初のうちはやはり赤ちゃんでしょう? 弱いんだって(笑)。だから大切に育てなきゃいけない(笑)。まず、刺激物を避ける。お酒は飲まない。というふうにか月か何週間の期間は育てていかなきゃいけない。

しかし、ちゃんと大きくなったらもう何にも気にする必要はなくて。彼は言っていました、自分はもう何か五十過ぎたら…、彼、元々柔道部で、凄いこんな屈強な人でね、やっぱり体育会系だから、お酒でもすごい飲み方をしていたんですよ。だけど、もう五十になったら、さすがに大学院生とコンパなんかしても何か明るく日はしんどいなと思っていたら、このサナダムシを飼ってからスッキリ(笑)。なんていうことを言ったり、本に書いたりして、お金を稼がないと自分はやっていけないけれども、こんな研究をしていたら、研究費は削られる。役に立たないと言われて、(安藤 もうお亡くなりには?)わりと最近亡くなりましたね。(安藤 死因は?(笑))死因は寄生虫じゃないことは確かです。(安藤 中にいた寄生虫はどうなったんでしょうね?) ああ、サナダムシはそんな長いこと生きていないので、ある程度成長したら自然に排出されちゃうんだって。だからまた新しいの飲まなきゃいけない(笑)。でも、これがわりと有名になって、やはり体の疾患を持っている人とか、それからダイエットのためにサナダムシを飲むということはやっているんですね。日本よりも多分欧米の方が知られていて、誰だっけ? マリア・カラスって一時期こんななっていたけど、サナダムシでまたスリムになって活動できるようになったと。メンタルにも影響を与える、ポジティブになれるらしいんですね。

「すごいですね」と言っていたらね。ここがやはりあいう医学の実際に研究している人は本当面白いと思うのは、「いやいや、吉岡先生。サナダムシというような名前をつけて、寄生虫やって思うから、そういう気持ち悪いとか、そういう印象になるわけで、実際にサナダムシの体表の表面の分子構造を見てみると、それは人間の小腸の腸管と全く同じなんです」ということは、腸の中に反転した腸がもう一個あると思うだけでいい(笑)。

腸の中に反転した腸があって、それが無駄な栄養とかを取ってくれと。その取ってくれた栄養をどうするのかというと、それはサナダムシが自分が生きていくために使うだけけれども、サナダムシというのはあれは雌雄同体らしいんですよ。だから一匹で雄と雌と両方の生殖器を持っているんですよ。で、それが一日に二百万個ぐらい卵産むらしいんですよ(笑)、成虫が。その卵を産んだのが、大便と一緒に外に出るんですよ。昔はそれを川に流していたから、その川の中のプランクトンが食べて、それが海に出て、マスとか、鮭みたいな種類の魚がそれを食べて、感染して…。で、なんか昔は富山などで、食べるとサナダムシに罹ると言われていたらしいんで

すけれども、日本近海でとれたマスとかを酢で締めたりすると大体死ぬんですけれども、中には生きてるんですね。それで感染すると。そういうサイクルができていた。しかし、戦後になってだんだんと潔癖社会になっていくと、要するに水洗トイレになるでしょう。あの水洗トイレのものは川に直接流れていかないので、そこで切れちゃうんですよねサイクルが。だから近海でとれたマスのおなかをあけてもいないらしいんですよ。いなくなっちゃったんですよ。だから、藤田さんの研究室には時々「吉岡先生も、名前を言ったら、えっあの人が……」という有名な女優さんとかが「先生ありませんか？ あれ。」(笑) みたいな感じで来ることがあるんだって。だけれども「なかなか僕も見つけようと思ったけれどもありません」って言うんだよね。「どうしたらいいんでしょうかね?」と言ったら、「それは私が飼っているでしょう。私がウンチをして、それを多摩川に流しに行くしかないですね」(笑)ということ……。

この話久しぶりにしたけれども、京都ビエンナーレとかの時にはわりと頻繁にしていたけども、久しぶりにしてもこの話のウケる度合いは……(笑)。やはり人間、こないだネットでやった時もそう思ったけれども、こういう排泄とかのことに関わる話題って根本的に好きなんですね。面白いんですよ。これはやはり生きていくことの原理だからね。そういうことかな。

発言者B 前回から参加させてもらっていてとても楽しいので、残りの分も参加したいと思ってるんです。ちょっと今回の内容じゃないんですけど、記号についてなんです。自分は、色々活動する中の一つで、占いもしてるんです。色々やっている中の一つがタロット。その理解を深めるためにシンボルとか象徴のことを自分で機会があったら勉強するんですけど、記号学と被る感じなんですか？

吉岡 まあ、被る部分はもちろんあると思いますね。今回資料として提示した、この内容(配布されたプリント資料)について詳しく言わなかったけれども、室井さんのこの「遺伝子の夢」という『哲学問題とテクノロジー』の中に出てくる話は、この世界について理解するためには、異界というか、ここではない世界があるということが必須条件なんだ、と。それが伝統的には、占いをも含むある種の神秘思想によって受け継がれてきたと。でも、その中で何をを使うかという、やはり記号の働きというか。記号というのは、今日の前にあるものも指し示すことができるけれども、それを超えて目の前にないもの、見えるものを通して見えないものを指し示すという力があるから、それは確かにその記号の働きだと思うんですね。タロットの図像というのは、図像自体は目の前に見えているので、これが何を表すということ言うだけだったら簡単なんだけれども、それだけじゃないわけですね。だから、それが記号がある種の異界というか、他の世界へ到達するための手がかりとして使われてきた伝統があると思うんです。

だから、タロットなんかは、やはり西洋の西洋神秘思想、錬金術とか、そういう西洋思想等のわりとベーシックなシンボルをたくさん利用するので、ある意味その勉強にもなるというか、タロットやっているだけでも、いろいろな周辺の知識が身に付く。例えば古いヨーロッパ絵画とかを見ると役に立つことも出てきますよね。つまり、現代人だったらその記号が何か分からなくなっているものが見えてくるきっかけにはなると思います。ただ、記号学というのは、それを客観的に考える学問なので、占いイコール記号学じゃないんですね。だけれども非常に関係の深いところではあると思います。

発言者B 人の置かれている状況とか、これからの事とかを一つのもので、意味するんですけど。これを細かく文章にすればするほど必要としている意味から遠ざかっていくというか、それを感

覚というか、もっと文章にせず、元のもっと短いワードって言うか。結局、自分の中では、記号とかシンボルとか、そういうふうになっていって、そっちの方が結局みんなのいろんなことに当てはまる場所に近づいていく。何かうまく自分でも説明できないんですけど。

吉岡 それは今回のテーマというよりは、前回の「プロジェクト」、あの時に紹介したフルッサーという哲学者が言っていた言語の時代以前に、画像の時代というのがあったという考え方。あなたが言ったようにタロットなどの占いで自分が認識したことを言葉に変換すると、何かちよつと外れていくという感覚。言葉というのは、リニア、線形なので、AはBであるという形式に落とし込まないと言語的知識にならないんですよ。だけれどもタロットだけじゃなくて、いわゆる僕らが占いとして今残っているような世界の認識のやり方というのは、これは言語文字テキスト以前からあるものですよ。だから画像の時代から引きずってきているものがいっぱいあるわけ。それは二次元であって、それが表す情報の形は線形の文ではなくて配置なんです。

だが、配置、置くじゃないですか、トランプでも何でも占いをする人というのは、平面の上にいるいろんなものを置いていくんですよ。こういうものが意味を持つんです。だからそれは何ですかというふうに文章で聞かれても、それは答えることはできるけれども、その文章にした知識というのは、それ自体、配置そのものが持っている知識の情報量のごく一部が取り出されているだけなんです。

星占いなんかでもそうで、要するに雑誌とかで「乙女座の人は今週、恋愛ダメです」とか。あれは文章じゃないですか。だけれども星座というのは要するに、コンステレーション、配置なんですよ。だから二次元の平面の中、ここにこれが置かれていて、そこからこの方角にこの距離でこれがあるということが情報であって、それは何ですかというその先は本来の情報じゃない。だから占いをやっている人は、多分それをまず訓練するというか、やはり現代、近代社会に生きている人は、どうしても認識は文に落とし込まれて客観的に線形で整理されるものにならないと認めてもらえないと思っているから、まずその先入観を相対化する、ちよつとそれを突き放してみよう。言ってみたら、古代人の心にちよつと近づくとということが多分占いをする人の訓練になっているんじゃないかなと想像するんだけど。僕は全くしないんですけど、そうじゃないかなと思っているんです。

安藤 誰か研究者とかいますか？ 占いという社会的現象に対して。それを問題にしているというか。

吉岡 現象として問題にしている人はいると思うけどね。

安藤 社会学とか文化人類学上で？

吉岡 やはり外から見て最終的に言語的な知識に還元しようとしているわけだから。そこに自分自身が踏み込んでいくと、現代では制度的な学問の中では危ないと見なされるわけでしょう。オカルトじゃないですか。「あの先生、ちよつとオカルトになったんか」みたいになるじゃないですか。いますけれどね。美学の僕の先輩にもいますよね。かなりこの人はそういう世界に入っちゃったなつていう。別に僕は悪いと思わないけれど、やはり今の社会の中で人に認められようと思うと、やはりあまり近づかない方がいいと思う人が多いですよ。

心理学とかの人でも時々いますよね。カール・グスタフ・ユングとか、ちよつとそうなんですよ。

フロイトの弟子ですけど、途中から離反したでしょう。それはなぜかという、ユングはやっぱりオカルトのことを言うから。自分自身がポルターガイストとか経験しているんです、普通に。意味のある偶然の一致とかね。パーティーであるテーブルに集まったら、その9人が全員同姓同名だったとかいうことがあるんだ、みたいなことを書くんですよ（笑）。

それはやはり認めがたいよね。普通の学問の基準からしたら、それはちょっとやばいじゃないですか。確かにその通りなだけけれども、今の小杉+安藤さんがギャラリー16でやっている作品にもちょっと引っかかってくることなんですけれど、現場で最先端の科学研究をしている人たちというのは、結構いろいろなものを見ているんですよ。

絶対論文には書けない、証明もできないし追試実験もできないし、しかしなんでこんなことを起こったんだろうって思うような経験をわりとしている人いますよ。でも言わない、言うとな利になるから。

安藤 文化人類学者……、中沢新一とか。

吉岡 文化人類学者は、それ大丈夫なんですよ。それはかつこに入れて扱えるから（笑）。でも、やはり自然科学は難しいし、特に物理学みたいな厳密数理科学はだめ。でも多いです。行っちゃ人も時々いるんですよ。「ああいつちやっとなこの人」、つまり近いということなんですよ。

発言者B タロットの左が過去で右が未来なんです。結構長くやっている感覚なので、自分の中に染み付いて、例えば何かのスポーツのルールとか、昔からあるようなことで、何故か左が先で右が後みたいな流れなんですね。何かその逆のものとか、もしこれがあるよというのがあったら教えてもらいたいなみたいな。

吉岡 横書きの文字の書き方は両方ありますよね。

安藤 バクテリオファージの構造も一つの方向を向いているでしょう。左巻きか右巻きは忘れたけれども、DNA自体がそうだ。

吉岡 植物がねじ曲がりながら成長する進化の方向性とかね。やはり何で決まっているのかとか。でも、生きのものの場合には、やはり対称性というのは完全ではないので、必ずどっちかに偏りがあるじゃないですか。僕らは全然こう左右対称じゃない、どっちか偏りがあって、それはやはり例えば発生する時に細胞の成長の度合いが完全に左右が均質だと多分効率悪いんじゃないかなって思うよね。ねじ巻いていた方が強いというか。僕の家近所に桜の木がいっぱい植わっているところがあるんだけど、崖つぶちに生えているやつって、必ず上から見て反時計回りにねじるんですよ。

不思議だなと思って、あれ、なんで逆だったらいけないんだろうと。風の方向なのか？ 確認してないですよ。まだ樹木の専門家に聞いてみたいなと思うけれども、なんでこっち向けに捻るんやろうと思って。捻った方が多分土に自分の根を固定する時に、スクリューの方が強いですからね。何て言うの？ ワインの線を抜くときのスクリューの作りで、あれまっすぐだったら抜けませんからね。捻って固定するべきだ。だからその捻りの方向性が決まっているというのが不思議。でも、そんな本なかつたっけ？ 自然界における……。

安藤 あります。『自然界における左と右』という。

吉岡 あと、何か月前にネットでバズっていた、犬がウンチする前に回転する方向は必ず一定で、それは地磁気に関係があると言われた（笑）。あれは本当なの？ 必ず右回りでなおかつ最後の決め位置が地球の磁気に依存しているという。この手の本当だったら面白いなという話は……。

左と右は面白くて、僕が研究してきたイマヌエル・カントという哲学者は、空間が実在ではなく直観形式、直観の形だというんけれども、その証拠は左右の手がこういう風に左右対称にしたときに、右手と左手というのは完全に各部分間の関係が同じなのに絶対重ならないでしょう、という。これは謎だよ、この論証。各部分間の関係が同じなのに、つまりこれは左手右手でなくてもいいので、鏡面对称になっている存在というのは、三次元空間の中でそれぞれとってみたら完全に親指の関節とこの関節の間の関係とか、形式的に完全に一緒なのに、右と左の手はどんなに回しても重ならない。何か大丈夫ですかねえ（笑）。でも何となく面白い。

安藤 最後の講座の死の問題とも左と右が絡んできたら面白い。そういう話入ってこないですかね。

吉岡 文化人類学的には、二分法というか価値づけがあるので、神聖なものとか汚れたものとか、正しいものと間違っただけのものとか。右というのはライトというじゃないですか。で、左というのはどっちかというとながティブな方というか。

安藤 装束もね。左前右前ってありますね。

吉岡 心臓って何で真ん中に無いのかとかね。

2024年1月20日(土) 於：京都芸術センター「大広間」

